



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第二四九号〜

穀雨

四月二十日

塩合

五十鈴川の河口に、汐合しおあいという地名があります。海の汐（潮）が合う、私
は川水と海水が混じり合う汽水域すいいきを指していると思っただけですが、二つ
の潮が合う地点であると、江戸時代の津藩士・山中為綱たみつなは『勢陽雜記せいようざっき』にし
っかりと記していました。

「塩合川 塩合の上にて両方にながれ、二見の里を中にして海に落ち行く。
潮汐もふたつの流れをさしのぼり、うしほ（潮）のゆきあふにぞ此名このなあるに
や。俗にはしわひと略語せり。うしほのみちたる時は三町（約三三〇m）ば
かり船にてわたりぬ。しわひのわたし（渡し）といふ」

古くは塩合と記し、この地点の上流で五十鈴川は二つに分かれているため
に朝夕の潮が満ちて来るときにはここで合うと説明されています。

伊勢市二見町溝口にある二見神社の裏手に回ると、汐合にあたる五十鈴川の
川辺に出ます。船が一艘、岸につながれていて、かつての「しわひの渡し」を
思わせました。鎌倉時代初めにこの渡しを馬に乗って渡ったのは、鴨長明で
す。よく潮が引いていたため、馬の蹄ひづめも潮にひたらなかったほどと詠んでい
ます。

二見がた遠とほのみなとやいかならん

塩合は駒の爪もひたらず

「遠のみなと」とは、大湊のこと。では近い湊はというと、二見の三津みつを
さしているのです。

また二見神社前には、平安末期に東大寺再建祈願のため伊勢神宮に参拝に
来ていた重源ちゅうげん一行が汐合の浦を詠んだ歌碑が立っていました。二つの潮が行
き交う景勝の川辺はまた、多くの人々が行き交っていたのです。

文

千種清美

